

嫉妬

藤本義一

昭和四十六年七月十日発行

嫉妬

定価 五五〇円

著者 © 藤本義一

堺市浜寺諏訪森町中一ノ二二八

装幀 貝原六一

挿絵 横塚繁

発行者 徳間康快

本文印刷 金羊社

カバー印刷 真生印刷

製本所 明泉堂

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇
電話代表(四三三)六二三一
振替 東京 四四三九二

乱丁・落丁本はお取りかえいたしません。

検印廃止

0093 - 128393 - 5229

嫉妬

藤本義一



夫の幻影

1

梅雨^{つゆ}の季節がくると、壁も天井も湿気を含んで重くなってくる。白い壁が灰色になるようだ。

「いやねえ、雨の日は……」

「ほんとに、うっとうしい」

扉の向うでそんな声がある。

テレビの朝のニュース・ショーは、一般消費者のボernasの使いみちを解説している。横長のグラフが出て、昭和四十一年から五年間の、各家庭のボernasの使いみちの変化を示している。

「著しい変化を申しますと、各家庭の貯蓄額が増えてきたことです。四十一年にはボernasの四〇パーセントが貯蓄されていましたが、今年の夏のボernasの見通しでは、五〇パーセントに近くなっているのではないでしょ

うか」

経済評論家がスタジオの主婦に向っている。主婦たちは一様に頷いて、先生のおっしゃる通りですわ、あたしたちの家庭もその通りなんですといった意思表示をする。

「減少してきたのは、借金とか月賦の返済、住宅資金への支出ですね。逆にお買物に対する出費は増加の傾向にあります」

五年間に変化のないのは、各家庭における旅行費用だという。

「これがまあ、現在の平均なんですわね。こういったパーセンテージのバランスで毎日がすすんでいくのが現代の普通の家庭なんです」

五年間といえは、姿津子^{しづこ}が野口と結婚してからの歳月といえる。なるほど、そういわれてみれば、この五年間の家計は、ボernasに限っていえばテレビの解説と同じようだと思う。べつに誰の意見を参考にしたわけでもないのだが、自然とテレビのグラフと同じ傾向になっているといえる。ただ、少し違うのは、住宅資金の貯金を別に行っている点だ。団地を出て、郊外の分譲住宅を手にした。銀行ローンの兼合^{かねあ}いとサラリーのバランスが、まだも

うひとつ明確に決まらないといったことが現状なのだ。

「だが、亮一が幼稚園に行く時には、庭のある一戸建の方がいいだろう」

野口は、時々、なんの気なしに、ぼつんという。彼は繊維関係の一流会社の商品企画部に勤めて、もう十年近くになる。課長資格試験に合格した。姿津子は、時々、夫が出社した後の空白の時間に、彼女が、かつて勤めていた本町のビルを想像してみる。今では高速道路が縦横にはしって、五年前の様子とはちがっているだろうが、彼女の記憶にある会社の、人事部の窓から見降した本町界隈の風景はなんの変化もない。井池と俗に呼ばれる繊維問屋の屋並が窓の下に葎き、赤のペンキ塗りのアーケードには、季節の売り出しに応じて、桜の造花や万国旗が飾りつけられたものだ。風の強い日、それらの造花を繊維街の人々は梯子がけで必死に針金で結わえていた。小さな眼下の人が、哀れに見えた日もあれば、逞しい大阪の商魂をそれらの人々から感じた日もある。

あの、心の変化は一体なんだったのだろう。同じ風景なのに、ある日は悲しく思え、ある日は楽しい希望を訴えてきたものだ。自分の心の変化が、そういう食いちが

った印象を与えたのだろうか、とくに、これといった悲しい事件があった日の記憶はないのに。

野口とはじめて口をきいたのは、七年前のクリスマス・イヴのパーティの終わった後、あの記憶の底に眠っている繊維街の路上だった。

「ぼく、商品企画部の野口ですが、どちらまでお帰りですか」

彼は油気のない髪を細い節だった指先で掻きあげながらいった。襟の折り返しの部分に脂肪の付いた黒っぽいトレンチ・コートを着て、思ったより鼻梁が高かった。

「住之江です」

「あ、南海線の。ぼくは高野線の三国ヶ丘です。下宿です」

なぜ、二人つきりになったのか、姿津子には今もってわからない。会社の八階の商品展示場で、サンドイッチとジュースとビールといったささやかなイヴのパーティがあり、途中から抜け出した一団が裏口の社員通用門の暗がりから御堂筋に吐き出され、南に道をとった。気付いた時には、御堂筋から一筋束の繊維街を二人は歩いていった。それも、どちらが先で、どちらが後だったかとい



う記憶はまったくくない。どちらかが、別の小路を横切つて、いつの間にか合流したような恰好であつた。男と女の出会いは、誰しもそんなのだろうか。

その夜、難波までの距離を、二人は人の波に吞まれたように歩き、軋む木の階段を上つて、二階の珈琲店に入つた。煤けたチーク材の造作の店内には、正面に、姿津子の目の高さまであるカウンターがあり、大小のサイフォンが並んでいて、シューベルトが流れていた。心齋橋筋のクリスマス・イヴに酔つた雰囲気とはべつの、静かな澱みに似た空気と暖かさが姿津子を落ちつかせた。

「ルシアン……」

彼は珈琲を注文し、トレンチ・コートを脱いで、空いた席に放り出した。

「ほく、学生時代、友人とよくこの店に来ました。商学部のかせに、文学論をやつたり、美学を論じたり……」

彼は、まだ大学を卒業して二年も経っていないのに、もうそれが遠い昔の話のようだったものだ。姿津子は、母一人娘一人の生活について話した。彼も、同じように、母が故郷で雑貨商をやり、妹が高校に通っているというようなことを話した。

2

亮一の昼寝の時間を利用して、姿津子は団地のマーケットに買物に出かける。これもきまつた日課のひとつだ。

「平凡でありたいという努力は、非凡なのだ」

誰にいつ聞いた言葉かは忘れたが、マーケットへのコンクリートの坂道を歩きながら、姿津子は思ひうかべる。最近は何地夫人のなかに、目立ってミニスカートとパンタロンが流行しはじめたと思う。パンタロンの方は突如出現した傾向があるが、ミニの方はこの一年に徐々に短くなってきたようだ。一センチ、二センチ、三センチと切り込んで、次第に流行に追いついたようだと思う。

姿津子は、そのどちらの派にも属していない。時にはスラックスを穿くが、タイトの場合が多い。それも地味な色調だ。髪は後に束ねて、白いプラスチックのヘヤーコームで止めている。

坂道の間、夕食の献立をつくるのも日課だ。月曜日

の夕食の献立が、大体金曜日にまわっている。

「この月曜日は……」

カレーだった。

ジャガイモは二個で五十円。玉葱^{たまねぎ}は一個で二十五円。

人参^{にんじん}は一本三十円。カレー粉は一袋五十円。シチュー用の肉は百グラム百二十円だから百五十グラムとして百八十円。合計三百三十五円。亮一のオヤツに乳菓を買ってやって、これで大体四百円の出費になる。

夫の帰宅時間は、週に二日ぐらいいは午後十一時をまわるが、他の日は、午後七時から七時半までの間だ。夕食の献立については、文句をいったことがない。これは旨いといったこともないかわりに、これは不味いと夕食を拒んだこともない。ビールは大瓶一本が適量だというが、酔っぱらったのは見たことがない。

なにもかもが平穩であり無事なのだ。

姿津子は、迷わずに目的の買物を済ます。マーケットの入口に入って、出るまでの時間が、きっちり二十分とあったところだ。

買物籠^{かぶ}を下げて、団地の階段を上って来ると、派手な花模様のフレアスカートに出くわした。

「あ、買物だったの」

義妹の節子だ。高校を卒業して、兄を頼って大阪へ出てきた。野口の無口さにくらべて、節子の方は饒舌^{じょうぜつ}だ。よくこれだけ話があると思うほど、話の土産^{みやげ}を持ってくる。次から次へ、話は飛躍しながら、姿津子が愕^{おどろ}くより先に話題は転換していくのだ。

どういった育ち方をした娘なのだろうと思うことがしばしばだ。姿津子との年齢の差とだけはいえない。本来、節子には、物事を深く考えつめるという気持はないのかもわからない。

「どうなの、仕事は……」

「駄目なの。全く駄目なのよ。会社の宣伝部とか企画部というのには名ばかりなのよ。コピーの元締めというのは、販売戦争の中心点にある営業部が握っているのよ。月曜に企画部長に会って、向うの気持を聞くとするわね、水曜日に持ってくわ、すると、クレームが営業部から出てくる。それで中一日おいて、金曜日に持ってくる。すると、その日のうちに、また今度は企画部からクレームよ。そんな繰返しで一週間がまたたく裡^{うち}に過ぎていくのよ、わかる」

彼女は、数人のグループで小さな広告宣伝の仕事をやっている。

「あーあ、一週間が、そんな無意味な繰返しなのよ」

声は大きい。亮一のお昼寝なんぞは考えてもいない。生来の地声というやつなのだ。

姿津子は、そんな節子の声をただそうとはしない。注意してみたところで、ほんの少しの間だけ小声になるが、すぐにもとどおりの大きさになってしまうのだ。

「現代っていうものは、そういったものなのよ。二十日鼠^{ねずみ}がね、小さな籠の中で、ほら、カラカラと回りつづけているのと同じことなのよ」

姿津子は勤めていた頃の、課長、部長の机の上を想像してみる。既決、未決と書かれた書類箱がある。受話器がひとつ。インク壺に赤とブルーのインク。堆積されたレポートが何日も同じ位置から動かない。姿津子の日常、節子の日常、夫の日常、社会の日常、すべてになんの変化もないのだ。

「オネーさん」

節子がいふ。オネエと呼び捨てにしていたが、兄に叱られてやめた。

「なに……」

「こんなウタ、知ってる……」

「歌……」

「和歌よ」

「和歌って駄目よ。そうだったことは、あたしは、てんで駄目」

「ま、聞いてごらんさいよ。こういうのよ、ヒトノミニ、ワガミヲイレテ、ユサブレバ、ココチヨシノノ、ヤマザクラカナ」

「なに、万葉集か……」

「いやねえ……。他人の体に、自分の体の一部を入れて揺するってことよ」

「いやねえ、節ちゃん……」

赤面したのは姿津子の方だ。節子はケロッとして、持参したシュークリームを食っている。

「誰が、そんなもの創ったのよ」

「知らない。新しいものじゃないんだって。昔からあるっていったわ。他にも、猥褻^{わいせつ}なのが沢山あるわよ。サイタ、サイタ、サクラガチャなんていうのもあるし、口に出すのも羞^{はづか}しいっていうのがあるわ。みんな、グル

「プの男友達が教えるのよ」

またたく間に三個のシュークリームを平らげた節子は、姿津子の淹れた紅茶に、もう一年間も棚に並んでいるブランドーを落とす。

「オネーさんたちの、セックス・ライフってどうなるのよ」

「そんなこと……」

「聞きたいのよ。夫婦の性行為って、一種の約束のようなものがあるの。たとえば、土曜日の夜とか……。それとも、日曜日の夜明けとか……ね」

「節ちゃんの想像の限りよ」

「それがわからないから、聞いているのよ、あたし……」

3

夕方に節子は帰って行った。姿津子は雨のあがつた機会にと、亮一を連れてバス停まで彼女を送って行った。

バス停に細身の雨傘とアタッシュケースを手にした若いセールスマン風の一人がいた。

「いやよ、あんなの。外観が気障きざったらしくて。懐ふところの方

は、カラカラ空財布ってとこなんだもの。あたし、結婚するのなら、五十年輩の男性だっていいと思うわ。妻子があつたっていいのよ」

「なんですって、すると、節ちゃん……」

「そうよ。二号さんになつたつていいと思うの。生活がエンジョイ出来るだけいいじゃないの」

本気でいっているのか、それとも冗談じやうだんでいっているのか姿津子にはわからなかった。一概に冗談だとはいきれないと姿津子は思った。節子は、そんな生活をはじめたとしても不思議でない雰囲気がある。二号生活が彼女を包んだとしても、彼女は変貌へんぼうしないような点がいくつかあるのだ。内に向っていく苦しみの針なんぞは、彼女は持ち合わせてはいない。なにもかもが、節子の場合には外へ向って無数の矢となって放たれていく。姿津子には到底希ぞむことが出来ない心の位置づけを節子は備えている。

「じゃあね……」

花模様をいろがえ躲して、彼女は連絡バスに飛び乗った。雨あがりの中で、無数の水玉が飛び散ったような鮮かさがあつた。

あれが女の若さというものだろうかと思えながら、姿津子は遠去かつて行くバスを見送っていた。気がつく、白い長靴の亮一が、バスに向って、一寸気おくれしたような表情で手を振っていた。

「亮ちゃん、もう、おばちゃんには見えなんだから……」

亮一は、眩しげに姿津子を仰いで、羞らしいの風情で肩を引き、手をおろした。そんな気弱なところが、夫の一面であるようにも感じられ、常に姿津子が夫に対して齒痒く思っているところも、その点に絞られるのではないだろうかと思った。この考えの根にあるのは、節子の放った姿津子たち夫婦の性生活に関する質問にあるようだった。

この五年間、夫が強引に性の要求をしたことはない。犯されるといふ感慨をこころ待ちにしているも、その気持ちは常に姿津子側の一人相撲に終ってしまふように思われた。この一週間、いや、二週間に、夫との交渉の数は一回だけであり、寧ろ、妻の方が夫を誘ったような営みであった。

性生活そのものが、あくまでも自然の理に基くもので

あるという宗教的な立場から見れば、彼と彼女の行爲は、神の称赞され給う理想のタイプといえるだろう。だが、それは、あまりにも味気ない意味のない約束ごとのように思われた。

「さ、亮ちゃん、帰りましょう……」

亮一は、両脚を踏んばって動こうとしない。マーカーの裏手の診療所との間にある砂場へ行こうとやっているのだ。

「この子は一旦いい出したなら、挺子でも動かない」

姿津子は眩いてみた。この頑固さは彼女自身の内側にもあり、夫にもある。夫の場合は課長資格試験に合格した時も、受かったよ、といったきりで、現在、会社でどういった仕事をやっているとか、会社の愉快なエピソードとかを一切いわない。ましてや泣言などはいわない。考えてみれば気弱でない頑張屋さんとも思われるが、反面、生活に小さなバラエティの花束がないようにも思われる。

姿津子にも、同じようなところがある。近所の誰それがこういうことをあたしにいつて、ほんとに口惜しかったということをいわない。母娘だけの生活が長かったか

性の営みでも、この二人の性格は如実にじつにあらわれてい
るといい。淡白に過ぎていく。姿津子が乱れると
いったことは、過去にはない。夫にしても、欲情に駆
られて挑みかかり、一匹の牡の獣と化すことはない。お
いに淡々とした僅わずかの時間に肉体を重ねるだけの話のよ
うだ。エクスタシーを表現した小説などを拾い読みして
みるものの、どこか別世界の出来事のように思えるだけ
だ。

亮一は、砂場のシーソーに乗ると納得した。なっとく

ま、ガスレンジの端に置いた。夫が帰って来たなら、すぐにも、あたためられる用意をした。

テレビの深夜映画を観終っても、夫は帰って来なかった。

湿気をおびた布団に横になつても、姿津子はなかなか寝つけなかった。

交通事故ではないだろうか。団地近くのバイパスに救急車のサイレンが通り過ぎた。三時間ばかり眠って、眼醒めると、もう夜明けの気配が窓にあった。

夫の夜具は、ひっそりと薄暗がりの中にあった。そこに姿津子は肩を落した夫の幻影を見て、はっとなつた。

夫の爪

1

夫の幻影は、背広を脱いだ姿で、白いワイシャツの喉のどの紐をひとつ外し、ネクタイの結び目を緩め、俯向うつむい

ていた。ネクタイは見慣れたダーク・ブルーに淡いブルーのストライプの入ったもので、二年前の結婚記念日に姿津子が贈ったものだ。値段は二千五百円の代物であった。

タイ・ピンを刺したワイシャツの鳩尾のあたりに歪みがあり、不恰好に膨らんでいた。

「どうしたの……」

はじめ、姿津子は、夫の幻影だとは思わなかった。膝頭についた両手もはつきりと見えたし、動かない横顔にも夫の実在を見た。五年間の結婚生活で馴染んだ夫の体臭さえも感じた。それは煙草の匂いと、汗くさい男の体臭と、甘い感覚、沈丁香の芳香に似た夫の匂いである。

「ね、どうしたの。なにかあったの……」

起きあがって、姿津子の視線が夫の眼の高さになった時、夫の姿は消えた。

「……………」

眼醒めた時、彼女は幻影だ、幻像だなどところにとめながらも、話しかけたようであった。なぜ、そうとわかっていながら話しかけたのか、彼女自身わからなかった。不規則に昂ぶってくる動悸を抑えながら、ああいっ

た言葉がどうして口をついたのだろうと考えてみた。

亮一が柔かな茶色の髪を丸い手で掻き毟るような仕草をして寝返りをうった。

姿津子は、もう一度、夫の幻影を見ようとするかのように、夜具の上に四つ這いの姿勢をとって、夫の夜具のあたりを窺ってみた。

なにも、なかった。

動悸が折り返した裸の膝頭に激しくつたわるのを姿津子は覚えた。

夫の横顔は、彫刻のように動きはしなかった。今にもなにかいいかげんな風情であった。訴えたいような表情であった。淋しい横顔といえた。あの、悲しそうな、淋しそうな横顔にあたしは語りかけたのだと、姿津子は自分を納得させた。

乾いた硝子壺の触れ合う音がして、牛乳配達がコンクリートの階段を上ってくる気配があり、その音は各戸の扉の前でとまって、また性急に数歩走っては、とまり、次第に姿津子の部屋の前に近付いて来た。ズツの大きな袋の中で、朝露に濡れた幾本もの牛乳壺の揺れる様子が想像された。

姿津子は、両脇^{りょうわき}でシートをおさえた不自然な恰好で、しらじら明^あけの六畳間の窓を見た。窓を斜めに截^きって、高圧線の電線が幾本もたれさがり、その向うの東の空には、朝焼けの雲が横一線におかれていた。

牛乳配達夫が過ぎ、新聞配達が終わっても、まだ団地は眠りの底に横たわっているように思われた。

三時間に充たない睡眠なのに、姿津子の頭の芯^{しん}は、はつきりと起きていた。

夫が、夜明けまで帰って来なかったということは、今までになかったことだ。五年間を通じて、この夜明けは、彼女にとっては初めての夜明けであった。

「うちの人人か午前様も午前様よ。午前三時までに帰って来たことなんかあらへんもんね」

不意に、そんな声が姿津子に聞えてきた。

あれは誰の声だろう。昨年の高校の同窓会で誰かがいった声だ。悦子かな、それとも恭子かな、加代かしら……姿津子は、クラスメートの誰彼を思い泛^はかべようとした。悦子は親子ほども年齢のちがう土建屋と結婚し、恭子の夫は税理士で、加代の夫は新聞社にいた。この三人のうちの誰かがいったのだろうと考え、そのうちの誰

の言葉かを追及するだけの根気はなかった。夫の身の上に、なにか変化があったのだ。これだけは確実なのだ。

出張なら前もってわかるし、社用で徹夜するなら、なんらかの報^しらせがあるだろうし、麻雀^{マージャン}はやらないし、酒も適量で、決して度を過すこともないし、それらのいくつかの項目を消してしまえば、後は「事故」しか考えられない。それも交通事故としか思えないのだ。

団地が、午前七時になって、ようやく眼醒めた。

隣りの部屋で、子供たちが騒ぎはじめた。五年生の男児を頭にして、女児二人がいる。洗面所の争奪戦から隣りの朝ははじまるのだ。

「ノリコの阿呆^{おほう}！」

五年生が叫んでいる。主人がベランダで大きな欠^{あき}咄^{はな}をし、妻は、いつものように疳^{かん}高い声で三人の子供を叱りつける。これもいつものことだ。この棟で一番賑^{にぎ}やかなのは、隣りの部屋だ。そして、一番静かなのは、あたしたちだと姿津子は思う。とくに、今朝^{けさ}の、この静けさは、まるで死んだような静けさだ。

「死」

縁起でもない。と、姿津子是否定してみるもの、想像は、次々と厭な予感で大きくなっていく。一層のこ
と、もつともつと大きく大きくなっていて、風船の中に詰められていく水素のようなものになって、あっさり
と爆発してくればいいのにと希う。そうだったら、どんなにか気楽なことだろう。

亮一は寝起きがいい。父が帰って来なかったことなど意に介さずに、布団の上に両脚を彎曲のかたちで投げ出して、赤く塗った木の喇叭で遊んでいる。ときどき、うまく呼吸が入り込んで、プーとかピーとか頓狂な音が放たれると、彼は、空気を断続的に吸い込むような笑い声をたてる。

姿津子は、コーンフレイクにあたためた牛乳を注ぎながら、夫の外泊に悪い予感が重ねられてくるのをなんとか拭い去ろうとしている。が、それらは容易に立ち去っていいこうとはしない。

2

午前九時を待って、姿津子は、夫の会社に電話をし

た。団地の管理事務所には、スラックスの事務員が一人、週刊誌を所在なげに見ているだけだ。

「もしもし、商品企画部の野口ですが、商品企画部の誰方か……あ、佐伯課長さんおいでになるでしょうか」

「はい、待って下さい」

交換手の声が佐伯課長の声に替る間、姿津子は、佐伯とは結婚式後一回だけ会ったのを思い泛かべた。あれは、梅田のデパートの家具売場であり、佐伯は妻子と買物に来ていたのだ。佐伯の趣味は磯釣りだと夫から聞いたことがある。あなたも釣をなさったら、一石二鳥じゃないのとけしかけてみたが、魚の生臭さは真つ平だ、とくに、釣針を魚の丸い口から外すのは想像しただけでいやになると夫は答えたものだ。

「あ、野口君の奥さん……」

佐伯の声だ。どちらかというと、声の質は女性的で瘡
だかい。

「はい、御無沙汰しております」

もっと単刀直入にいうと思うのだが、日常の挨拶から入ってしまう。

「なにか、野口君が……病欠かな」

「いえ……」

「すると、親戚にでも御不幸が……」

佐伯の声は、砂地に指先で輪を描くように、先にさきにと想像の輪をひろげていく。それは善意にもとづく推理というやつなのだろうが、今の姿津子には、そう先回りされると、言葉が失われてしまうような迷惑さを感じられるのだ。

「あの……野口、昨夜、帰ってまいりませんでした」

姿津子は電文のように一句、一句を区切っている、はたしてこれでいいのだろうかと考え直してみる。これでいいのだ。どこにも間違いはない。事実なのだから。

「え、なんだって。野口君が帰っていない……そんな……」

彼に限って、そんなことはあり得ないという口吻である。姿津子としては予期した佐伯の言葉なのだが、不安の波は、大きく新たに湧いてくる。

「ほんとですか」

「ええ、ほんとうなんです」

こんな切羽詰った折に、誰が嘘をついて擲論たりするものかと肚立たしさを覚える。

「どうしたのだろう、野口君……」

声が低くなる。

「昨日は企画会議があつて、それが終わったのが午後六時過ぎだったな。例の日米間の繊維問題で、会議はいつになく営業部も入ってねえ……」

姿津子には、べつに報告する筋合いでもないことを佐伯は話しつづける。午後六時過ぎに社を出たとすると、いつもの通り午後七時過ぎには帰宅しているわけだ。それが一夜明けての午前九時過ぎまで夫の音信がないというのは、そこに既に十五時間の空白が生じたことになる。

「おかしいな、実におかしいなあ。奥さん、社に連絡があるか、お宅に連絡があるか、それはどっちともわかりませんが、とにかくどちらかに連絡があればですね、お互いにすぐに報らせることにして……」

佐伯の声は、狼狽に早まって、少しく空回り気味につづく。姿津子は、それがどういう連絡で、一体どこからやってくるのが聞きたいと思う。間いつめたい気持なのだ。佐伯の狼狽の度合は、彼女の狼狽にますます輪をかける恰好になってくる。

「とにかくね、そういうことで、ね、わかりましたね」